

アビメレク

—— 聖書に登場する一人の独裁者の興隆と衰亡 ——¹

ジョナサン・マゴネット

日 原 広 志 (訳)

アビメレクの興隆

創世記にもアビメレクという名を持つ王達が登場します²。しかし私達がここで学ぼうとしているアビメレクと呼ばれる聖書の登場人物は、士師記で一つの章全体が捧げられているあの人物の方です。その物語は士師記9章で語られますが、実際はその前章でもたらされるいくつかの本質的情報から始まると言えます。アビメレクの父はヨアシュの子ギデオンです。ギデオンはミディアン人との戦争に勝利をもたらしました。その戦争の中で、ギデオンは一つの異名エルバアルを得ています。彼は指導者として大いに成功を収めたので、民は彼に要請します。全イスラエルを治めて欲しい、後に続く彼の子や孫にも治めて欲しいと、要するに、王朝を樹立して欲しいと〔要請します〕³。しかしギデオンは返答します。「わたしはあなたたちを治めない。息子もあなたたちを治めない。主があなたたちを治められる」(士師記8:23)⁴。このようにギデオン物語は既に、サムエル記で最後まで進展するところの、自分達を支配する王を任命したいという民の願望を予め示しているのです。

1 〔訳注〕これは2015年5月18日、西南学院大学大学博物館2階講堂で行われた神学部ロングチャペルでの公開講演である。原題は、Avimelech: The Rise and Fall of a Biblical Dictator。

2 〔訳注〕創世記20-21章アブラハム物語に登場する「ゲラルの王アビメレク」(20:2)と同26章イサク物語に登場する「ゲラルにいるペリシテ人の王アビメレク」(26:1)を指す。

3 〔訳注〕以下、本文中の〔 〕は訳者による補足を表す。

4 〔訳注〕以下、章句の引用は『聖書 新共同訳』による。

ギデオンには多くの妻がいたので、その腰から出た息子は七十人を数えた。シケムにいた側女も一人の息子を産み、彼はその子をアビメレクと名付けた。(士師記8：30-31)

命名に関して本文で使われている実際のフレーズは普通使われない表現で、文字通りには「彼は彼の名を置いた」です。更に、ギデオンが支配者になることを拒絶したという状況が与えられているのに、どうして彼は彼を「アビメレク」—その最も疑問の余地なき意味は「私の父（アビ）は王（メレク）」です—と呼んだのでしょうか？それは民を支配して欲しいという申し出を拒絶したにも関わらず、実は彼が我が子に投影していたところの、ギデオンの個人的野望を反映しているのでしょうか？しかしそれよりも、アビメレク自身がその動詞〔置いた〕の主語であり、王になるという自らの野望の故に、どこかのタイミングで、彼が自分自身にその名を与えた可能性があります。

アビメレクの母、つまりギデオンの側女、はシケムの町の出身です。シケムは、聖書が描く時代より遥かに先立つ歴史を持つ、カナン人起源の町でした。それ故シケムの町が、イスラエル十二部族の一つマナセ族の領域内にカナン人の飛び領土として残存していた（ヨシュア記17：7）のか、あるいは完全にイスラエル化されていたのかは定かではありません。物語の展開から察するに、おそらくシケムはイスラエル、カナン両民族の混合状態を含んでいたと考えられます。しかしアビメレクが自らの政治的野心の助力を請うべく、母方の一族を利用した事は、彼等がカナン人であることを暗示しています。もしそうであるなら、妻のステータスさえ持っていない〔側女の子、しかも〕カナン人女性の子として、アビメレクはギデオン家において二重の意味でアウトサイダーだったこととなります。おそらく、二民族のどちらにも完全には属していないという、彼の混合的・周辺的なアイデンティティの故にこそ、様々な〔紛争の〕種が既に蒔かれていたのであり、それらが以下に続く劇的な出来事を準備したのでしょう。

9章の冒頭の六つの節は驚くほど要約された形でアビメレクの無慈悲な権力掌握の物語を語ります。

エルバアルの子アビメレクはシケムに来て、母方のおじたちに会い、彼らと母の家族が属する一族全員とにこう言った。「シケムのすべての首長にこう言い聞かせてください。あなたたちにとって、エルバアルの息子七十人全部に治められるのと、一人の息子に治められるのと、どちらが得か。ただしわたしが、あなたたちの骨であり肉だということを心に留めよ。」母方のおじたちは、彼に代わってこれらの言葉をことごとくシケムのすべての首長に告げた。彼らは、「これは我々の身内だ」と思い、その心はアビメレクに傾いた。彼らがバアル・ベリトの神殿から銀七十をとってアビメレクに渡すと、彼はそれで命知らずのならず者を数名雇い入れ、自分に従わせた。彼はオフラにある父の家に来て、自分の兄弟であるエルバアルの子七十人を一つの石の上で殺した。末の子ヨタムだけは身を隠して生き延びた。シケムのすべての首長とベト・ミロの全員が集まり、赴いて、シケムの石柱のあるテレビンの木の傍らでアビメレクを王とした。(士師記 9 : 1 - 6)

これらの節を更に詳しく見て行きましょう。始まりは選挙が近い時にはいつでも大変見覚えのある、純粋な政治的駆け引きです。リーダーシップに野心を持つ者が自らの政治的基盤とするのに都合のよい選挙区を見出します。本件ではアビメレクは、自分が父ギデオンのイスラエル族共同体に対してはアウトサイダーでしかないため、母方の一族を訪ねます。彼の最初の主張は政治的リーダーシップの本質についての一つの興味深い議論を代表するものです。私達は、それを支持するいくつかのありがたい主張を書き添えることができます。指導的立場に70人の人間を持つことは、政策決定に権威が伴う所ではどこでも相当な非効率性を導くに違いありません。更に彼等が全体のために一緒に行為するよりも、むしろ自らの個人的な利害から行動する方が当然です。また特定派閥から好意を得る人間も大勢になると、巨大な贈賄の温床にもなりかねません。それよりも、一人の人間が社会を総合的に引き受ける場合の利点を見てみましょう。とりわけ、その地域のほかの国々において見出される形態もこちらなのです。しかしそうした微妙な政治の話は省略して、アビメレクは自らの現実

に基づく主張をします。「わたしが、あなたたちの骨であり肉だということを心に留めよ。」〔つまり、〕私はあなたたちの中の一人であり、あなたたち家族の一部なので、当然、私はあなたたちの利益を一番に考えるでしょうと〔示唆するのです〕。多分彼もまたここで、カナンとイスラエルの間の政治闘争を巡る民族カードを切っています。いかにこのアプローチが 発生し一定のプロセスをたどって演じられるかについて、同時代的諸例を世界中に見出すことは困難ではありません。アビメレクのケースにおいては、彼の一族は、彼のための期待に違わぬ支持者達であることを証明します。これは想定外のことはありません。勝利を得るのは政治的理論ではなく、「彼らは、『これは我々の身内だ!』」と思ひ、」とある通り、彼等の利権に訴えることなのです。

今までの所、私達はノーマルな政治的活動の領域内にいます。シケムの首長達（文字通りには「バアレ シェヘム」「シケムの主人達」）が賛同したことはまだ許容されるべきものです。アビメレクの実行力を彼等は確信していたので、彼等は喜んで彼のキャンペーンに資金を供給します。その金はその地方のカナンの神、バアル・ベリトの神殿からもたらされました。そのことが意味するのは、もし現代的術語に翻訳するなら、支配階級と宗教的指導者層が一緒になって、財政的支援を以てアビメレクの後ろ楯についたということです。私達はまだ合法的政治的活動の枠組内にいます。アビメレクの野望と活動が間違った方向へ転じるのは、ようやくこの時なのです。

手に入れたその金で、彼は「中身のない」(empty) そして「結果を顧みない」(reckless) 〔「命知らずのならず者」(新共同訳)〕と描写される男達を雇います。私は論じてみたいのですが、先ず最初の術語「レキーム」(文字通りには「中身のない」)は土地を持たない人々、つまり形式上その社会構造内に利害関係を持たない人々を指します。同じ術語はこの士師記の更に2章後で、エフター彼もまた家族から追放されていました一の周りに集まった男達に対して使われています。この意味において彼等は、サウル王の手から逃亡していたダビデの周りに集まって来た人々のようでもあります。もし事態が同じなら、ここでも「中身のない」は振る舞いの見地からは中立的な〔ならず者のような否定的評価を含まない〕術語であって、単にその社会における彼等の地位を描

写しているだけとなります。第二の単語「ウ・フォハズィーム」「結果を顧みない」(reckless)はヘブライ語聖書中にたった4回しか登場せず、暴力を喜んで請け負うことを仄めかします⁵。その単語はヤコブの長子ルベンへの祝福の中では、無謀な振る舞いを批判しつつ、「水」と結びつけられています(創世記49:4)⁶。他の箇所では、預言者ゼファニヤ(3:4)とエレミヤ(23:32)がいずれもその語を、民をミスリードする同時代の預言者達を攻撃するために用いています。有効にアビメレクは喪うものが何もない危険な人々を募って小さな私兵を作っていきます。それをを用いて、彼は今や権力を握るための第二段階を追求していくのです。

アビメレクは、彼の軍隊と共に、オフラにある彼の父の家へ行き、そして70人の兄弟を殺しました。その殺害に関して使われている動詞は「ハーラグ」であって、私達がこの状況に予期するであろう不法な故殺(murder)を意味する単語「ラーツァハ」ではありません。この事に何ら意義がないと判断し得るのは、他にいつもと違う細部の描写が何もない場合です。彼の70人の兄弟の殺害は、一つの石の上で起こっています。ヘブライ語聖書の中にはそのような実践に関する証拠は何もないのですが、暗示されているのは、これがある種の祭儀的殺人についての言及かもしれないということです。別のレベルで見れば、一つの石についての言及はアビメレク自身の運命の中にその反響を見出すでしょう。彼はテベツの町を包囲中に塔の上から石臼を頭に落とされ、殺されました。そう見る場合は、それは行為に対して相応しい罰が下るという考え方、「尺には尺を」の一例ということになるでしょう。しかし、私はこれが単純に同時代的事象の過去への投影であることを自覚していますが、むしろもう一つ

5 〔訳注〕語根パハズが動詞として2回(士師記9:4, ゼファニヤ3:4)、男性名詞として1回(創世記49:4)、女性名詞として1回(エレミヤ23:32)と計4回登場することを指す。本文のウ・フォハズィームは動詞パーハズの分詞男性複数ポハズィームに接続詞ワウの付いた形である。

6 〔訳注〕「ルベンよ、お前はわたしの長子／わたしの勢い、命の力の初穂。気位が高く、力も強い。お前は水のように奔放で／長子の誉れを失う。お前は父の寝台に上った。あとき、わたしの寝台に上り／それを汚した。」(創世記49:3-4)において「水(マイム)のように奔放(パハズ)」と名詞単数形パハズが水の語と共に用いられている。

の可能な説明を暗示してみたいと思います。アビメレクの最初の主張は、一人による支配と対比させた場合に70人の集団的支配には諸々の短所が想定され得るという、政治的リーダーシップの本質についてのものでした。政治的クーデターに伴う特徴の一つは、新政権に正統的雰囲気を与えるために、その乗っ取りが法的に正当化し得るものであるかのように思わせる必要です。そこで政治腐敗など何らかの理由をつけて、前政権の弾劾を要求します。そしてそのプロセスの一部に、彼等の有罪を「立証する」よう適切に操作された、公的な「見せしめとしての裁判」を含むものです。そのような訴訟において、有罪とされた人々は公開処刑による死を宣告されることもあります。ですからまさにそれを意図して、70人の兄弟達の事例において、「不法に故殺する」という動詞は避けられ、「殺す」という単語が使用されたというのにはありそうなことです。それは行き当たりばったりの暴力による死ではなく、「一つの石」の上で十分に似非裁判的形式を伴っての死だったこととなります。

ところで、シケムの首長達がアビメレクに銀70枚を支払い、そして70人の兄弟（一人は難を逃れましたが）が殺されたことは余りにも甚だしい一致であるように思えます。兄弟一人につき銀一枚。それは彼等の首に懸けられた賞金であったようにも響きます。もし事実そうであったとすれば、後発事象に対する遙かに大きな責任がシケムの首長達に帰されることでしょう。

こうした暴力的手法で権力を奪取したので、アビメレクは今や自らの新しい主導的役割に対する形式的追認を求めます。そこでシケムの首長達は、ベト・ミロの民と共に、ふさわしい儀式でアビメレクを王として一「メレク」として一任命します。アビメレクが何者で、何をしかねない人物かを承知した上で彼を王としたことは、彼の暴力的所業に関する罪を彼等に共有させることとなりました。そしてこのことは神によって覚えられていたとこの章の終わりで記されています。それにも関わらず、権力を強奪する人々の訴える諸々の手段に改めて思いを致すなら、アビメレクを王として受け容れる準備のない人々に対して、暴力【も辞さないアビメレクというそ】の脅しは十分役割を果たしたと言えます。当初彼を支援した時、彼の“親分”達は、アビメレクごときコントロール出来ると思っていたのかも知れません。しかし代々の独裁者達が証明

しているように、一度その座についたが最後、独裁者は万事をコントロール出来る者になってしまうのです。

ここで私は一步退いて、この物語ひいては士師記の、ヘブライ語聖書全体の中における位置づけについて確認したいと思います。ユダヤ教の伝統においては、ヘブライ語聖書は三区分から成っています。第一部は伝統的に神の直接的啓示として見られ、「トーラー」と呼ばれ、モーセ五書から成ります。第二の主要な区分は一般に「ネビイーム」「預言者達」と題された部分なのですが、実はヨシュア記、士師記、サムエル記、列王記はここに含まれて「前の預言者達」（ネビイーム リシヨニーム）と呼ばれ、その直後に「後の預言者達」（ネビイーム アハロニーム）ーイザヤ書、エレミヤ書、エゼキエル書および十二小預言書一を従えているのです。このようにこの第二部全体が伝統的に預言の形態として、すなわち預言者自身とこれら様々な書物の著者の教えを媒介とした神の啓示の形態として、看做されてきたのです⁷。私がこの事に言及するのは、プロテスタントの用いる聖書における士師記の位置づけとの対照を示すためです。そちらも同様にヨシュア記の後に士師記があります。しかしその後にはルツ記が来るのです。なぜならその書は「士師が世を治めていたころ、」〔ルツ記1：1〕というフレーズで始まるからです。次にサムエル記、列王記が続きますが、そればかりか歴代誌、エズラ記、ネヘミヤ記そしてエステル記も来るのです。その配列は年代順です。そして私が示唆したいのは、これらの書物〔ヨシュア記、士師記、サムエル記、列王記〕を「預言」としてではなくむしろ「歴史」として扱う関心の違いが、それらに〔ユダヤ教とは〕大変異なった重みと意義を与えているということです。「歴史」としてのアビメレク物語はある興味深い過去の出来事です。しかし「預言」として捉えるなら、アビメレク物語はいかなる時代でも、いかなる人間社会にあっても〔有益な〕、政治的野心の本質についての、そして権力が破壊的目的のために巧みに操作され得

7 第三部は「ケトuppイーム」「諸書」で、詩編、箴言、ヨブ記、五つの「メギロート」（雅歌、ルツ記、哀歌、コヘレトの言葉、エステル記を含む小さな巻物集）、上述の「歴史的」書物群、そしてダニエル書を含む。この第三部はより直接的に人生経験を内省している「靈感を受けた」書物とされている。

る手法についての、一つの力強い警告となるのです。事実、これらの数節〔士師記9章11-6節〕は、独裁者はいかにして生じるのかについての一つの有効なテンプレート（型版）です。この光の中でそれらを読むことで、人は、例えば、ヒトラーの興隆の諸段階の軌跡をたどることが出来ます。すなわち、自分に融資した特定団体の利権へのアピールを経て、彼の最初の目標を達成するための私兵の獲得とテロの利用〔へ進みます。次に〕、反対者達を除くために法の形式構造を利用することを通して、自らの諸活動を合法化しつつ最盛期を迎え、そしてついに、大量虐殺の計画を実行する〔という具合に〕。〔それ故〕アビメレクの話は読まれ、絶えず想起される必要のある訓話なのです。

ヨタムの寓話

ギデオンの生き残りの息子は、多分「孤児」を意味するところのヘブライ語の単語「ヤトム」を洒落てと思われませんが、ヨタムと呼ばれています。彼はこの章で一つの重要な役割を演じるのですが、その後は聖書の記録から消えてしまいます。彼はヘブライ語聖書の中にたった二つ見出すことの出来る木々についての寓話の中の一つを遺しました⁸。王を選ぶことを求める木々達についてのヨタムの寓話は、アビメレクが権力を握るその文脈にフィットします。しかし全ての優れた寓話同様、この寓話も普遍的に適用できるものです。兄弟達が殺された時ヨタムは辛うじて難を逃れました。そしてシケムの首長達によってアビメレクが王に任命されたことを知ります。ゲリジム山の上に立って、彼は自分の寓話を大声で叫ぶのでした。

木々が、だれかに油を注いで／自分たちの王にしようとして／まずオリーブの木に頼んだ。『王になってください。』オリーブの木は言った。

8 もう一つは、列王記下14章9節にあり、アマジヤの挑戦に対してヨアシュによって与えられた例の返答〔「レバノンのあざみがレバノンの杉に、『あなたの娘をわたしの息子の嫁にくれ』と申し込んだが、レバノンの野の獣が通りかかって、あざみを踏み倒してしまっただけだ。』〕である。

『神と人に誉れを与える／わたしの油を捨てて／木々に向かって手を振りに／行ったりするものですか。』

木々は、いちじくの木に頼んだ。『それではあなたが女王になってください。』いちじくの木は言った。『わたしの甘くて味のよい実を捨てて／木々に向かって手を振りに／行ったりするものですか。』

木々は、ぶどうの木に頼んだ。『それではあなたが女王になってください。』ぶどうの木は言った。『神と人を喜ばせる／わたしのぶどう酒を捨てて／木々に向かって手を振りに／行ったりするものですか。』

そこですべての木は茨に頼んだ。『それではあなたが王になってください。』茨は木々に言った。『もしあなたたちが誠意のある者で／わたしに油を注いで王とするなら／来て、わたしの陰に身を寄せなさい。そうでないなら、この茨から／火が出て、レバノンの杉を焼き尽くします。』（士師記9：8-15）

この寓話に対する学問的アプローチは王国への批判という枠組でそれを捉えることでした。それはもう既にギデオンが王になることを拒絶した話の中に仄めかされており、そしてサムエル記の主要なテーマです。この読み方においては、最終的に王となるのは、最もありそうになく、そして値しない、社会を害する恐れのある人物です。ヨタムの引き続き行う説明が明確にするように、これはアビメレクの文脈の中に相応しいものです。しかし、単体の本文として、それは違う仕方で見られることが可能です。つまり、もし生産的で賜物ある人々が進んでリーダーシップの責任を引き受けようとしなければ、その時は事実ふさわしくなく良心も無い人々こそがそれをする結果を招いてしまうということです。茨を選ぶことの馬鹿らしさは、木々を自らの陰の中に避難させようとする茨の笑止千万な申し出によって明らかになります。しかし個々の木々の、辞退を正当化するための実際の主張もまた重要です。〔候補者となったのは〕いずれも、人間の滋養や喜びにとって価値ある果実を付ける木です。しか

しオリーブの木は自らが受け取っている榮譽を失うことを恐れています。いちじくの木は自らの甘味さ—多分安楽な暮らしの快適さのことでしょ—を失うことを望みません。ぶどうは他者に喜びを与えることで得られる人気を失うことを望みません。ぶどうは何かしら失うのです。なぜなら、権力は他者を転覆させる厳しい選択と決定を要求するからです。リーダーシップの代価に支払う損失についての彼等の恐れは筋の通ったものです。しかし彼等の辞退は結果としてさらに莫大な損失を社会に支払わせることになるのです。

ヨタムは大いなる皮肉を込めつつ自らの寓話から結論を引き出します。

「もし今日、あなたたちがエルバアルとその一族とに対して誠意をもって正しく行動したのなら、アビメレクと共に喜び祝うがよい。彼もまたあなたたちと共に喜び祝うがよい。もしそうでなければ、アビメレクから火が出て、シケムの首長たちとベト・ミロをなめ尽くす。またシケムの首長たちとベト・ミロから火が出て、アビメレクをなめ尽くす。」ヨタムは逃げ去った。彼は逃げてベエルに行き、兄弟アビメレクを避けてそこに住んだ。

(士師記9：19-21)

アビメレクの衰亡

その次の節〔9：22〕は私達に、アビメレクが3年間イスラエルを支配したという情報を与えます。「支配する」という動詞「サーラル」はこの文脈においてユニークです。名詞としての「サル」はしばしば「君侯」「王子」と訳されますが、その意味は、荒野でのモーセのリーダーシップに照準を合わせた強力な批判における使用例から最もよく導き出すことが出来ます。その単語はモーセのキャリアのまさに始まり、彼が争っている二人のヘブライ人の間に介入しようと試みた場面で登場します。彼等の中の一人はモーセに異議を唱えます、「誰がお前を我々の監督(サル)や裁判官にしたのか。お前はあのエジプト人を殺したように、このわたしを殺すつもりか」(出エジプト記2：14)。モーセはエジプトを去り、追放されて暮らさねばなりませんでした。その後の人生で、荒れ野でイスラエル諸族を導いていた折り、モーセはコラと呼ばれる

男によって指導されたある反逆に直面しなければなりません。しかし〔コラのレビ族だけが逆らったのではなく、〕いくつかの党派が巻き込まれており、その中には、モーセが事実上取って代わった、イスラエル諸部族の中で先頃まで政治的指導者の立場にあったルベン族も含まれていました。武装された反乱軍と対峙する中で、モーセはその指導者ダタンとアビラムに面会に来るよう招きます。しかし彼等は皮肉を極めた言葉で拒絶します。「あなたは我々を乳と蜜の流れる土地から導き上って、この荒れ野で死なせるだけでは不足なのか。我々の上に君臨したいのか。」(民数記16:13)「我々の上に君臨する」と訳されているヘブライ語のフレーズは「ティスタレル アレヌ ガム-ヒスタレル」で、動詞「サーラル」の強意形が反復されています。この文脈において、この動詞の使用は明確にモーセが権力を乱用していることを含意しています。そのことは、アビメレクの支配もまた抑圧的で専横なものであることを暗示しています。人は権力を手にした途端に、それをふるうようになるものです。ですから士師記が次節で私達に以下のように告げても何ら驚くには値しません。「神はアビメレクとシケムの首長の間、陰悪な空気を送り込まれたので、シケムの首長たちはアビメレクを裏切ることになった。」(士師記9:23)

首長達の裏切りは、いわば通行人を襲う追いはぎのように、山々の頂に待ち伏せる者を配置するという形態を取ります。おそらくアビメレクの収入源にダメージを与え、彼の通商路を保護する能力に疑問を呈する狙いでしょう。この展開にもまた想起すべき事があります。つまり、権力が暴力によって獲得される時、更なる暴力を引き起こすことがよくあるということです。その上更に、もしリーダーシップがその先立つ体制を強奪して得られたものなら、将来同じような暴力的政権交代を行う手本が示されたこととなります。これはエベドの子ガアルと兄弟の物語への登場を以て起こり始めます。先例アビメレクがしたように、ガアルはシケムの首長達の信用を勝ち取ります。実りある収穫の後で、彼等は自分達の神の神殿で祝宴を開き、酒に酔ってアビメレクを呪います。この良い気分の中で、ガアルは何故私達がアビメレクとその役人ゼブルごときに仕えねばならないのかと尋ねます。(ゼブルは例の「サル」として描写されています。多分アビメレクが支配するのと同じやり方〔抑圧的に専横的に〕でそ

の町を支配するようアビメレクによって任命された人物なのでしょう。) その代わりにガアルは、多分その町の創建について言及しつつでしょうが、シケムの父ハモルの名を引き合いに出すのです。ここでも、先例アビメレクの場合と同様に、私達はカナン人たるシケム族とイスラエル族との間に存する競争意識についてヒントを与えられます。事実、シケムとハモル、これらの名についての言及は、私達にヤコブの生涯において起こったある事件、彼の娘ディナが外出中、ハモルの子シケムによってレイプされた話を思い出させるものです(創世記34章)。しかしシケムはその娘との結婚を望んだので、彼の父ハモルはヤコブと彼の息子達—後者〔ヤコブの息子達〕は自分達の妹の身に起こった事で恥辱と怒りを覚えていました—と折り合いをつけようとしました。婚礼を催すためにヤコブの息子達に押し付けられた条件の一つは、シケムが自分の民にイスラエル族同様の割礼者になるよう提案することでした。「シケムの町」の成人男性全員がこれに応じ、しかしその手術後の傷の痛みはまだ苦しんでいた時、ヤコブの息子達は彼等を攻撃し、全ての男達を殺し、彼等の家畜の群れとらくだを奪いました。ハモルの名を呼び起こすことによって、ガアルはカナン起源を重んじるその町の住人を奮い起こしているように見えます。また彼はいにしへの闘争の記憶にさえ訴えているのかも知れません。

他のことはどうあれ、アビメレクは有能な軍人と言ってよいでしょう。暗闇に紛れて彼はシケムに軍を投入し、それを4隊に分け、そしてその姿が夜明け前の闇の中に識別できない間に攻撃します。ガアルはシケムの首長達と一緒に、ただ手ひどい敗北を喫するためだけの一戦を余儀なくされます。ガアルの運命は記録されておらず、ただゼブルが彼をシケムから追い払ったとあるだけです。しかしアビメレクは疑いなく、自らの権威に対するいかなる種類の反逆にも寛容であることは出来なかった—それもまた独裁者に共通する特徴の一つです—ので、翌日、彼は畑に働きにシケムから出て来る民を待ち伏せし襲います。今度は軍事的勝利だけでは満足せず、彼はその町の全住人を殺し、町を物理的に破壊し、塩を撒き、自分の在位中は決してそれが再建されることのないようにしました。彼はそれから“シケムの塔”として知られるある場所へ向かいます。そこでは他の首長達が自分達の神殿の中に避難していました。その神殿

はエル・ベリトの家〔と呼ばれ〕、そこからアビメレクに最初の資金援助がなされた所でした。それが今破壊される事は、犯罪の本質に正確に適合した刑罰〔が下る〕というあの聖書的基本原则「尺には尺を」のもう一つの例となることでしょう。多分アビメレクの神殿破壊もまた、権力を握った者が、自分がそこへ至るために初期段階では他人の援助を必要としていたという事実に憤慨し、この事実についてのあらゆる軌跡と記憶を破壊することに取り組み始めるというあの可能性を例証するものです。さて再び、アビメレクのリーダーシップのスキルが示されます。彼は自ら率先して枝を切り落とし、そして自分の率いる男達に同じようにせよと鼓舞し、それから千人の男女を殺すべく避難所に火を放ちます。このことは、火が茨から出て一つまりアビメレクから出て一彼を支持した人々を破壊し尽くすというヨタムの寓話と呪いの文字通りの成就です。

しかしアビメレクの幸運は尽きようとしています。隣の町テベツを攻撃し、戦闘の勝利を手に入れかけた時、彼はもう一度、要塞化された塔を焼き落そうと試みます。しかしその塔の上にいた一人の女性が、石臼を彼の頭上に投げ、彼に致命傷を負わせます⁹。しかし、女に殺されたという恥を記念として遣すよりもむしろ、彼は自分の武具を持つ従者に代わりに自分を殺させる道を選びます。士師記9章は、神は、アビメレクが70人の兄弟を殺して父に加えた悪事の報復を果たされたという教訓で終わります。そしてとうとうシケムの人々もまた罰を受けますが、それはアビメレクが行使しかねない暴力性を知りつつ、なお彼を王にしてしまった彼等の悪の故です。最終的に皮肉なねじれで、この章の中で12回「バアレ シェヘム」「シケムの首長達」として言及されてきたその同じ人々は、その死においては、単に「アンシェ シェヘム」「シケムの男達」として、自らの重要性も力も最後には何の意味も持たなかった者達として、言及されています。

私はもう既に士師記の中におけるこの物語の位置づけの重要性について、またヘブライ語聖書の中においてそれが預言として分類されていることについ

9 この出来事はサムエル記中、ダビデ王により故意に怠業工作（サボタージュ）された軍事作戦の渦中でヘテ人ウリヤが故殺されるというあの醜い物語において回顧されている（サムエル記下 11：20-21）。

て言及してきました。しかしこの書物〔士師記〕にそれ〔アビメレク物語〕が存在することはもう一つ別の次元を持っています。アビメレクが権力を握るこの物語は、2章後〔士師記11章〕のエフタと呼ばれる一人の男が権力の座に上る物語と多くの類似点を持っています。エフタは自身の物語の結末のために特によく知られています。彼は神に対してある無分別な誓いをしたばかりに、自分の娘を明らかな犠牲に献げてしまうのです。私が「明らかな犠牲」と言ったのは、その娘は一種の隠遁生活に入ることを受け容れただけであって、殺されたのではないとの主張も存在するからです。隠遁生活を受け容れることは、子を持つ可能性を犠牲に献げることであり、それは、エフタが自らの王朝を創始することについて抱いてきたかも知れないあらゆる希望を破壊するものだ〔という解釈です〕。しかし〔今日は〕あの〔終盤の娘の犠牲をめぐる〕物語まで後ろには下りません。エフタ物語の始まりにおいて、私達は彼が、アビメレクと同様に、家族の中でアウトサイダーであることを学びます。なぜなら彼は遊女の子であって、父の妻の子ではなかったからです。彼の兄弟達はエフタが父から相続することが出来ないように彼を追い出します。兄弟達から逃れて、彼はトブの地に身を落ち着けます。そこで彼はあのアビメレクに加わったのと同じ種類の「中身のない男達」「レキーム」を自分の周りに集めました。しかし彼等は、アビメレクによって使い勝手の良さ故に雇われた人々〔「レキーム ウ・フォハズィーム」〕のように「ポハズィーム」「結果を顧みない」を付けた形では呼ばれていません。エフタの運命は、ギレアドの長老達が彼を軍事的リーダーになるよう要請した時に変わりました。このことは彼に失われた名誉を再建するためのチャンスを与えます。そしてその問題が彼にとって大変重要だったので、自らのミッションの成功を保証しようと試み、エフタは“戦闘の後、自分に挨拶するために出て来た最初の間人間または動物を犠牲にささげる”と誓いを立ててしまうのです。エフタを扱うとすれば一回の講演丸ごとが彼のために必要となるでしょう。しかし、ここで重要なことは次の点だけです。アビメレクのように、類似した困難な生い立ちに縁取られていながら、エフタは何とかして自らの正当化し得る怒りを抑制し、適切に振る舞ったということです。彼の物語はアビメレクの物語への一つの効果的な対位旋律 (counterpoint) として

機能しており、そしてアビメレクの振る舞いへの更なる批判的展望を加えています。

いくつかの結論

もし私達が士師記9章の全体構造を見るなら、二つの事が注意を惹きます。アビメレクが独裁者として権力を握るまでの部分は、わずかに6つの節〔士師記9：1-6〕しか記述に要さず、おまけにその所要期間については知らされていません。しかし彼の支配にけりをつけるまでの部分は、3年間〔と期間が明示され〕、36もの節〔士師記9：22-57が記述に費やされ〕、そして数えきれない流血が必要とされました。この非対称はそれ自体、邪悪な人々が政権を獲得するのを許してしまうことは、一旦権力を持ってしまった彼等を止めることよりも簡単であり、彼等を権力から引き摺り下ろすために社会が支払う損失ははるかに莫大なものになるという、一つの警告になっているのです。

その上更に、9章は3部に分かれています。その始まりと終わりはアビメレクの興隆と衰亡に焦点が絞られ、そしてその中心にはヨタムの寓話があります。もし私達がこの分割の中に、多くの聖書物語と詩的章句に共通して見られる一種の同心円状のパターンを認識するなら、その意図された効果は中心部の本文を浮き彫りにすることにあります。実際ヨタムの寓話は独立した余生 (afterlife) を持っており、アビメレクの血まみれの経歴の詳細が忘れ去られた後も長く生き残るものです¹⁰。しかし物語と寓話、両パート共が、私達が社会の統治に関して取らねばならない責任についての、そしてこれがなされない時に支払われる莫大な損失についての、一つの警告として仕えています。

10 アビメレクはかのアビメレク協会の名で人々の記憶に残っている。同会では自薦会員達がホテルや他の公的施設から国際ギデオン協会の無料配布聖書を撤去するという奇怪な仕事へと献身している。明白に無神論に傾倒した者達の活動だが、彼等は自分達が盗んだあるいは解放した聖書について、アビメレクという名と出くわす程度には読んだことがあるに違いないと言えるのは皮肉なことである。勿論もし彼等がその物語を真剣に読んだことがあるなら、彼等は自分自身を残忍な独裁者と同定することについて再考したに違いない。

ある人々は、そのように暴力的で不愉快な物語がヘブライ語聖書の中に見出されることに居心地悪さを覚え、それ〔暴力的で不愉快な物語〕はそこ〔聖書の中〕で何をしているのかと問うかも知れません。もし私達が道徳の手引きを求めて聖書に向かい、また模範的宗教家像を探しているならば特にそうでしょう。しかしそれは問いの出し方があべこべなのです。アビメレクの物語はヘブライ語聖書中に傑出した場を持っているという揺るぎない事実が与えられている以上、むしろ私達はヘブライ語聖書それ自身の本質と目的についてこそ問いを發すべきなのです。そのような資料が、また他にも同じように問題を含んだ話が存在しているという揺るぎない事実、もし私達が私達の宗教的投企 (commitment) について真剣であろうとするならば、人間の諸々の現実と諸々の経験の全てが扱われる必要があるということについての一つのリマインダー〔思い出させるもの〕なのです。その上更に、この古代の図書館の中に見出され得る教えと警告は、私達の人生の全ての局面—個人的なものも、政治的なものも、靈的なものばかりでなく、物質的なものも、一を扱うことを求めているのです。